

「趣味については（たとえ論議されえぬとしても）論争されうる」[KU, AA 05: §56, S. 338]。

カントが『判断力批判』（1790年）上で提示したかかるテーゼは、Guyer [2005 & 2008] などに代表される優れた先行諸研究において、主にはヒュームが「趣味の基準について」（1757年）論文において掲げた、趣味の基準の所在への問いに呼応しているとされている。一方では趣味に関する、互いの意見の合致するに至る希望を認めつつも、他方で経験的事実としては、まるで折り合うところのない“趣味の多様性”も認められることを、ヒュームは鋭く見抜いていた。カントは「趣味のアンチノミー」において、自身の超越論哲学の枠組みに沿うようにして、ヒュームの議論を再構成しているといえる。

本発表の目的は、カントの「趣味のアンチノミー」が備える、一種の他者論的視座の妥当性を画定することにある。一口に他者論といっても、その論じ方は様々である。われわれは絶えず周囲から眼差しを受け、“眼差される者”としての自覚を有している、そこにおのれと外部との裂開が見出され、“眼差される者”として他者の眼差しが想定される————こうした主張もまた、馴染みの他者論の一つである。

しかしながら「趣味のアンチノミー」は、かかる他者論とは異なった視角を備えている。上述した限りの他者論であれば、他者の趣味を必要とせず、おのれ自身の趣味のみで満ち足りている人物（カントが『実用的見地における人間学』（1798年）にて「感性的 [美感的] エゴイスト」と称しているような人物を指す）でさえも、講ずることができるだろう。具体的な他者と語らうことで、自己の有限性が自覚され、見知らぬ他者さえ認められる————といった他者論と同様である。おのれの趣味と他者のそれとに開きがあることを認めつつ、単に“agree to disagree”と居直るだけならば、それは他者を尊重しているというよりむしろ、他者を蔑ろにしているとはいえないか。「趣味のアンチノミー」はこうした他者論とは異なる視座に立っている。

本発表ではこうした、カントの趣味論上の他者論を、彼の超越論哲学の枠組みに照らして、その妥当範囲を検討する。そのためには、彼の趣味論において、いかなる点にアプリオリテートが担保されているのかという、演繹論上の問題設定をくまなく照射する必要がある。その過程で、他者論としての妥当範囲が画定されていくであろう。